

勝海舟上

子母澤寬全集

澤寛全集 六

海舟 上

編集委員 司馬遼太郎 尾崎秀樹

講談社

子母澤寛全集 6

勝海舟(上)

昭和四十八年三月二十四日 第一刷発行
昭和四十八年八月 十日 第二刷発行

著者 子母澤寛

装幀者 辻村益朗

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)二三(945) 大代表 振替 東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大製株株式会社

一一二〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえ致します

© 梅谷龍一 1973

0393-251567-2253 (0) (企)

子母澤寬全集第六卷

目次

第一卷 黒船渡来

開眼	二
天悠々	三
火焰	三五
草	五〇
旅語	五五
月明	六
送りませ	八
春の花	九

犬蓼	110
同胞	113
菊花	116
離合	118
散花賦	117
壬子凶	117
津走魚 ぶり	119
風浪	125
阿修羅琴	129

菊月……………三二

紅い花……………四〇

夏風……………五一

残る鳥……………六四

第二卷 咸臨丸渡米

日本丸……………八二

生死……………九二

転変……………一〇三

東へ……………	三二
朱たたき……………	三四
月見れば……………	三七
同じ国なり……………	四九
大海原……………	六七
立隔つとも……………	八三
爽風……………	九五
富士……………	四三
不惑……………	四五

冬牡丹	四三六
破墨	四四八
飛び潮	四五九
墨梅	四七〇
寒月	四八〇
京の春	四九一
青葉の雨	五〇二
青鷺	五一三
水打つ	五二四

夕爽……………三五

夏木立……………五四六

内患……………五五七

解説・尾崎秀樹……………五六

付勝海舟関係写真Ⅱ写真・榊原和夫

・中谷吉隆

勝
海
舟
(上)

第一卷 黒船渡来

開眼

今日は、勝も、ずいぶん、みっちり身を入れて遣つて行つた。脇のところは血がにじんでいたようだ。

島田虎之助は、師匠の男谷精一郎から、特に言葉があつて、自分のこの浅草新堀の道場へ来ている勝麟太郎という奴の、何処となく柵の外れたそれでいてちゃんといふと算盤の合うような如何にも妙な遣いぶりだが、今日はしみじみ気に入つた。

昼までで、門人達がみんな帰って行くと、道場は実に深閑として終う。虎之助は小さな庭のある一と間についた狭い縁側で、膝の前へ沢山木賊を散らかしながら、頻りに檜の木剣を磨いていた。

眼を上げると、青い空が見えるが、丁度その庭の真ん中に、まるでこの青空を見せまいとでもするように、大きな榎の木が枝を張って、その若葉の匂いが島田の着ている木綿の黒紋付に染みる程に強かつた。

陽ざしが、葉のすきをもれて、ちらちら木剣へ流れて来る。

遠くから、飴売の太鼓の音が聞えて来た。と、一緒に、誰か、玄関で、

「御免よ」

そんな声がしたような気がした。

師匠のお蔭で三軒つづきの長屋を借りて少し手を入れて二軒を道場に拵え、一番端の一軒へ自分が住んでいるこの小道場は、近所隣も近いので、その客が、果して自分のところかどうかを、確かめようとしている中にまたつづけて、

「居ねえのかえ。え、おい」

と客は早口に云つた。

虎之助が、——なんだ無作法口をきく奴だ——そう思いながら木剣を磨く手をやめた時には、もう、女房のいないこの道場のたった一人の内弟子の大野文太が、その客と応接している声が聞えた。

「勝だよ、勝の隠居だよ」

虎之助は、大野の取次を待つ迄もなく、直ぐに立つと、白い小倉の袴の膝の埃を払って、玄関の方へ出て行つた。

「おう、おのし、虎さんかえ」

麟太郎の父、勝小吉が、土間に立っていて、声をかけた。

虎之助は、一寸言葉が出なかつた。

小吉は、月代の延びた頭に、腰までの黄色い短羽織を着て、女のようなしなれた小紋袴の着流し。上前の裾をちょ

いとつまみ上げているが、そこから緋縮緬の長襦袢が出て
いる。素足に雪駄、これを爪先きに半分程も突っかけて、
しかも、腰には、おもちゃのような短い木刀が一本。

「倅がいつもいつも世話になり、心の中では有難てえとも
うれいとも思っているが、どうにも埒くちもねえくらし
故、思いながらも無沙汰をしたが、まア許しておくれよ。
今日は、それや、これや、礼にやつて来たという訳よ」

虎之助は、作法正しく手をつかえた。

「むさいところで御座いますが、どうぞお通り下さい」

小吉はうなずきながら、

「御免よ」

気軽く上つて来た。

大野は、眼をくるくるしていた。年はまだ二十六だが、
師匠本所亀沢町の男谷精一郎を除いては、先ず江戸随一と
さえ噂され出している島田の道場へ、これはまたなんと
いう棒な来客だろう。

ひと間へ通つて、小吉は、まじまじと島田を見ていた
が、

「おのし、男谷の道場では、滅法かんしゃくの虫を立て、
みなみな痛い目に逢わされるというが、こっちでは手軟ら
かか倅も毎日無事にけえつて来るね。もちつと、みしみし
遣ってくれるがいいじゃあねえかえ」

「は」

島田は、逆うまいとしているようであった。小吉は、師

匠の叔父である。掛違つていて逢うのは今日がはじめてで
あるが、三十七の若さで、小普請人の身が隠居をさせられ
た程の人間である。小吉は幼名で、本当は左衛門太郎、隠
居して夢酔と名をかえたが、誰一人、左衛門太郎とも夢酔
とも云われない。

「ところで、どうだえ、倅は、物になるかえ」

「は？」

「男谷は、口がうめえから、何事も修行次第などと抜か
すが、おのしは、まだ、九州から出て来て幾年にもならね
え故、江戸前の口うまにはなるまいから、おきき申すの
だ、どうだえ麟太郎は」

島田は太い眉を少し上げた。そして、睫毛の濃い大きな
眼を真つ正面に見すえて、

「わたくしが申す迄もなく、あなた様は、すでに御存じの
事と思いますが」

「いや、それがき、親は馬鹿さ、子にはあめえよ、他人の
事はわかつて、おのが子の事はわからねえものさ」

「しかし」

「云つておくれよ」

島田は少し黙っていた。そしてなお眼ばたきもせず小
吉の両眼を睨むようにしたまま、

「剣術遣いにはなれませんが。剣術遣いになる剣術ではあり
ません」

「ふむ？」

「それだけです」

小吉は幾度も幾度も、まるで、おもちゃの虎が首をうごかすようにうなずいた。そして、

「流石だねえ、おのしは」

といった。それから、双方、なんにも云わなかった。

飴売の太鼓が、道場の横辺りへとまって、いつ迄もそこで叩いている。

「うるせえなあ」

小吉は、そういったが、島田は、やっぱり口をつぐんでいる。怒っているかな、小吉は腹の中でそう思った。

「先生」

と、島田は少し重く口を切った。

「わたくしは、田舎もので、江戸の事は一向にわかりませんが、どうも、江戸の武士は、風俗も悪く、服装なども、まるで女のような人間なども居り、青痰でも、吐きかけてやりたいと思いますが、先生は、どう御考えなさいますか」

島田は、さっきから、じろりじろりと、頭のとっぺんから爪の先迄、小吉の風態を見ているのである。小吉は、ふふんと笑った。そして、

「おいらの姿なんぞも嫌えかえ」

島田は、何にも云わずに横を向いた。

*

小吉に、いろいろなわるさを仕掛けられて潰された道場が江戸には幾つもある。しかし、島田はそんな事などは、びくともしない。が、ただ、師匠の叔父である、それだけ

で、師匠に対すると同じ態度を忘れまいと努力した。

「先生は別です」

こういつてのけて、島田は自分でも、ほっとした。

小吉と、島田が連立って、道場を出たのは、それから半刻ばかりの後であった。もう七つ時分を過ぎていた。

小吉が、島田は酒を飲まないといったら、それなら浅草に甘いものがある、初対面のちかづきに、そこまで御苦労を願いたいと、無理矢理に引っ張り出して終ったのである。

「貰はどうだえ？」

「修業中故喫みません」

「ふふーん。そんな事でどうなるえ。貰ぐれえに敗けるようじゃあ江戸の修業は出来ねえよ。それより、ほうら見ねえ、あすこに女が来る、いい女だろう。え」

「そうですな」

「あんなものだって、恐がっているようじゃあ本当の修業は出来ねえよ。おのし達は、堅くなって、こちこちに成るのを修業だとかばかり思っているよ。そんな事じゃあ真物の人間は出来ねえね」

「は」

小吉は、女の方へ手招ぎをした。新堀端浄念寺の築土塀の前であった。

「おい。馬鹿におめかしをして、何処へ行くえ」

「ああら先生」

二十一二、綺麗ないい女だ。にこにこ顔で小吉の前へ小

走りに寄った。

「虎さんや」

と小吉は島田を見て、

「こ奴あね、浅草の奥山にいる水茶屋の女だが、これでいいところのある奴だ、亭主と云うか情夫というか、そ奴が巾着切でね、こ奴もいくらかはやるらしいが」

「まア、先生、飛んでもない、あたし、知りませんよ」

「お白洲じゃあねえんだ。知っていると云ったっていいんだよ。おれどもあ、これから、あっちへ行くところだ、お前

先きへ行つて、いい女をずらりと並べて置いてくれろ」

「ほんとでござんすか」
「本当だよ。この方あな、島田虎之助とおっしゃる江戸一の剣術遣いだ、怖えんだぞ、粗相のねえように——いいかえ」

女は、うなずいて、改めて島田へ一礼すると、とつと、行つて終つた。

丁度その女とすれ違いに、四十がらみの侍が、みんな十二、三の若い侍を五人つれて、同じ堀端の、東漸寺前の、駄菓子屋からそろそろ出て来るのと、小吉は、ばつたりと顔を合せた。

「小吉だっ！」

誰かが叫んだ。忽ち六人はまるで焰でもかぶつた時のような、興奮に駆り立てられた。

年上の一人が、つつとみんなの前へ飛出して来た。もう刀の欄へ手をかけている。

「小吉、前へ出ろっ」

しかしその小吉はにやにやしながら島田を振向いた。そして小声で、

「今、喧嘩を見せて上げる。面白いものだ、御覧よ」

小吉は対手へ向つて行くと共に、羽織を脱ぐと、さつと島田の方へ投げて寄こした。そして、それと同時に、一番先きの奴へ、組みついて行つた。それが悉く、瞬きをする間もない素早やさである。

小吉は、左手で対手の鬚ぶしを驚つかみにして、こつちへぐんぐん引つ張つて来ながら、右手にはもう対手の刀を奪い取つて、その峰で、対手の背中を叩きつけて、
「真ッ昏間、生くらなんぞを振廻しやがって、大べら棒奴、師匠の面汚したあうぬが事だ」

怒鳴りつけて、さて一段と大声で、

「島田虎之助先生、こ奴らあ、みんな割下水の近藤弥之助先生のところの弟子さ。馬鹿ばかりで、こうして往来で、喧嘩を売る、いや飛んだ滅法界者だ。ちょいっと片づけて、直ぐに行く故、先生は、一足先きに奥山のさっきの女のところへ行つて、お呉れよ、蛇の目屋ときけあすぐにわかるから、え」

こういうと、またぐんぐんと対手を押して、外の奴らの方へ出て行つた。みんな刀をぬいたが、今島田という声をきいてぎっくりした様子である。

「さ、来ねえかよ、小吉が喧嘩の仕口を、手を取つて教え